

明現寺の羅漢石像

(福山)

参道の石段を登りきったところに、16体の羅漢石像（大部分来待石製^{きまちいし}）が安置されている。

石像についての由来や記録は無く、施主^{せしゅ}や時代などは不明である。中心の一体を「將軍地蔵」と呼ぶ人もあり、尊崇^{そんすう}の対象として次々に奉納されたものであろう。

羅漢とは、正しくは阿羅漢^{あらかん}といい、尊敬と施しを受けるに価するというサンスクリット語である。大乘^{だいじょう}仏教では、最高の境地に達した聖者を仏と区別して羅漢^{らかん}といった。中国、日本では、仏法を護持^{ごじ}することを誓った16人の弟子、釈迦に随^{したが}った500人の仏弟子をそれ

ぞれ十六、五百羅漢と称して尊崇した。木食上人^{※もくじきしょうにん}作といわれる京都・清源寺^{せいげん}の五百羅漢（江戸時代）や喜多院（埼玉県）の石像、興福寺の乾漆像^{※かんしつぞう}が著名である。



(注)

木食上人：山梨県に生まれた遊行僧^{ゆうぎょうそう}で全国に多くの神仏像を残す。倉吉市には秋葉大権現（八屋）、稲荷大明神（下田中）、神庭神社の稲荷像（円谷）3体を残す。

乾漆像：麻布を漆で塗り固めて作る彫像で、中空の像。奈良時代の仏像に多い。